

沖繩 県史

図説編

前近代

沖繩県教育委員会

総説

本書について

■ 図説編・前近代のねらい——図やモノなどで描く琉球史

この図説編は、図やモノなどを主な素材にして、先史時代から琉球王国時代までの琉球史を描いてみようという新たな試みである。

ここでいう「図やモノなど」とは、古文書や金石文などの文字資料以外の歴史資料のことである。近年、神奈川大学日本常民文化研究所が「非文字資料」という呼称を提唱しているが、その内容は、絵図、美術工芸品、建造物、考古資料に限らない。匂い、色、音、身体表現といった形のないものなど人間が生み出したあらゆるものや生物としてのヒトそのもの、そして人間社会をとりまく景観と環境にいたるまで、じつに多種多様な資料を含んでいる。

人類史のほとんどは文字がない図やモノなどの時代だった。琉球史でいえば、旧石器人が琉球列島に住み始めてから7・8世紀までの3万年間は、全く文字資料がなかった。文字資料を中心に琉球史が議論できるようになるのは中国（明国）との朝貢貿易が始まった14世紀以後の600年余に過ぎない。しかも、文字資料を作成したのは主に支配者層で、庶民の大半は明治初期まで文字の読み書きができなかった。

このように考えると、文字資料を中心にした歴史が人類史の一部しか見ていないことがわかる。ならば、図やモノなどの分析から、従来の文字資料の研究では見えなかった新たな琉球史の世界が浮かび上がるのではないか。そうした期待を込めて、図やモノなどを主な素材にして琉球史に切り込み、図解したのがこの図説編である。

■ 図説編・前近代で扱う地域と時代

本書では、沖縄県域を中心とした琉球列島の前近代（近代より前の時代で、先史時代から1879年の琉球処分まで）を主な対象にしている。具体的には、かつて琉球王国の領域で現在は沖縄県域の沖縄・先島（宮古・八重山）と、先史時代から沖縄と同じ文化圏で琉球王国の領域でもあった奄美を含めた地域の、旧石器時代から近世琉球までの歴史である。

本書で使用する時代区分と時代名称を図1に示した。琉球・沖縄史の通説的な時代区分〈先史時代—古琉球—近世琉球—近代沖縄—現代沖縄〉を基本にしたが、琉球史の時代区分と時代名称については様々な考え方があることを断っておきたい。

例えば、貝塚時代については「縄文時代、弥生～平安時代並行期」という呼び方もひろく使われている。また、「グスク時代」と「古琉球」の位置づけには様々な見解がある。文献研究では「グスク時代」を「古琉球」の前半期に位置づけるのに対し、考古学では「古琉球」という時代名称を使わずに「グスク時代」とよぶ傾向が強いが、グスク時代がいつ終わるのかについては定説がない。「グスク時代」を八重山では「スク時代」、奄美では「按司世」と呼んでいる。こうした現状に加えて、通説的な時代区分を見直す議論も始まっている。「古琉球・近世琉球」に対し「琉球国前期・後期」とする考え方や、「グスク時代」を17世紀前半までに引き延ばそうという提案もある。

時代区分は研究者や地域の人々の歴史観と深く関わっており、様々な時代区分の考え方はそれぞれに意義がある。本書で用いる時代区分は、あくまでも読者の理解を容易にするための便宜的なものであることを断っておきたい。

■ 全体構成と活用方法

本書の構成は、〈総説〉につづいて〈I 琉球史の時代像〉で通説的な時代区分にそって先史時代—古琉球—近世琉球の各時代の特徴を紹介し、〈II 図やモノでみる多様な琉球史〉でいろいろな角度から歴史を解説した。巻末には〈年表・主要参考文献・図版出典一覧等〉をまとめた。

〈II 図やモノでみる多様な琉球史〉が本書の核心部分である。26のテーマを立て、従来の時代区分にとらわれずに図やモノなどを主な素材にして琉球史に自由に切り込んでみた。これまでの琉球史では論じられることがなかった図説編ならではのテーマをいくつかあげると、II -11「変貌する首里・那覇の都市景観」、II -12「描かれた首里城正殿の虚実」、II -14「肖像画にみる国王と家臣」、II -17「時間と音」、II -19「外からの琉球人イメージ」、II -23「色」、II -24「身体表現」などがある。

本書は、読みやすくするために解説文は簡潔にし、図・写真の所蔵機関などの情報は省略した。図・写真の所蔵機関や解説内容をより詳しく知りたい方は、巻末の〈主要参考文献・図版出典一覧〉を参照していただきたい。

■ 図説編の課題

図説編の編集では、専門部会でテーマを設定した後、各分野の研究者で5つの班を組織し、事務局とともに分担執筆者の素案について議論と修正を重ねながら原稿完成に至った。編集を終えて、この新たな試みについて感じたことをいくつか述べておきたい。

まず、年代設定と史料批判の問題がある。図やモノなどには年代が記されないのが普通で、これに年代を与える作業をへて歴史資料になる。そして、文献史料と同じように史料批判をすることで

	九州	奄美	沖縄	宮古・八重山		中国	朝鮮
原始	旧石器時代	旧石器時代	旧石器時代	旧石器時代	3万年前	旧石器文化	旧石器文化
	縄文時代	?	?	?	1万4千年前	仰韶文化 竜山文化	新石器文化
	弥生時代	貝塚時代	貝塚時代	下田原文化	9千年前	夏商(殷) 西周 春秋・戦国 秦・漢	古朝鮮
	古墳時代 奈良時代			無土器文化	3千年前	隋・唐	高句麗 百濟 新羅
古代	平安時代	グスク時代 (スク時代)	先島先史時代	11世紀	北宋 南宋	高麗	
鎌倉時代 南北朝時代	グスク時代 (按司世)				古琉球		琉球王国時代
室町時代 戦国時代 安土桃山時代	琉球支配 (那覇世)					琉球	
近世	江戸時代	薩摩藩支配 (大和世)	近世琉球	第二尚氏 後期	1609年	明	
近・現代	近・現代	近・現代	近・現代 (沖縄県)		1879年	清	

図1 琉球史の時代区分と周辺地域

歴史資料としての有効性と限界性が明らかになる。図やモノなどから歴史情報を読み取るために必要なこれらの基礎作業が十分だったか反省が残る。

図やモノなどの歴史資料が多種多様であるがゆえの問題もある。本書の核心部である〈Ⅱ 図やモノでみる多様な琉球史〉は、新たな切り口による斬新さはあるが、描いた歴史が多様すぎて琉球史の全体像が見えてこないという問題もある。これらの多様な情報を総合化して琉球史の全体像をいかに再構成するかが今後の課題だろう。

本書のような図やモノなどの非文字資料から歴史を読み解く「図説編」は、文字資料が少ない地域の市町村史編纂にとっても有効な方法になると考えている。どの地域にも考古資料、民俗資料、工芸品、自然環境などの非文字資料が豊富にある。これらの資料を専門分野の記述にとどめず、歴史資料としての分析と地域史としての総合化の作業を行うことで、地域に暮らした人々の目線で地域の歴史を叙述できるのではないだろうか。この「図説編」の試みが、市町村史編纂にも拡がり深められることを期待したい。

＜安里 進＞

教育現場等での活用

教育基本法は「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」の育成を教育の目標としてあげている。平和で民主的な社会の形成者を育成するという目標は、小・中・高を通して学習指導要領では社会科・地理歴史科・公民科にしかない。したがって、教育の目標を実現することを期待されている教科が高校（社会科・地歴科）を含む社会科系教科といえる。従来、教育現場においては「知識の量」が重視され、教育の目標を実現することは等閑視される傾向にあった。しかし、2017年に告示された学習指導要領は「主体的、対話的、深い学び」の実現を求めるに至った。これは大きな教育観の転換である。教師が知識を教え込むのではなく、子どもが主体的に、人類の文化と対話する中で、深い学びに至るという教育観へ変わった。まさしく教育の営みそのものの中に、教育の目標が実現できる状況が生まれている。本図説編は、子どもが「沖縄の文化」と主体的に対話できる素材を織り込んでいる。

■ 狩猟の民と「平和」

歴史教育は、人類が登場して以来極めて長い時間狩猟の民であったことをイメージ化させるすぐれた実践を残している。しかし、その長い狩猟の時代は、飢餓の時代であり、それゆえに平等な時代であったとし、農耕によって、余剰が生まれ、支配者が生まれ、階級社会が生まれたと歴史教育は説明してきた。その後、工業社会、情報社会と人類は「発展」してきたと説明してきた。それゆえに、狩猟の人々に対して「野蛮」というまなざしをうみだした。ところが、縄文遺跡でみつかった四季に応じた豊かな縄文時代像は、生きるのに困難という像を覆した。また、佐原真等は、縄文遺跡には戦争の痕跡はなく、弥生遺跡から痕跡が出現したと論じ、狩猟の民を研究する文化人類学においてもそのことは裏付けられている。人類史の大部分は平和の中にあつたことになる。

歴史教育は「流れ」というストーリーが理解に必要なだと言われてきた。しかし、前述してきたように「流れ」は事実によって覆るのである。数々の多様なストーリーが研究論文であり、研究を集約しストーリー化したものが教科書である。研究を集約したゆえに有用なものではあるが絶対では

ない。むしろ教科書が相対的なものであり、教師と子どもたちはそのことを前提に、事実に戻って学んでいくことが肝要である。「新沖縄県史」は各論編で多くの論考、ストーリーを生み出してきた。本図説編ではそのストーリーを吟味するための素材を提供することを編集方針とした。

以下、例として「戦争」と「平和」という視点で本図説編を見てみよう。

■ グスク時代と戦争

狩猟をみてみよう。グスク時代の勝連グスクや浦添グスクから貝塚時代には見られない兵器としての矢じりが出土している。この変化は日本における縄文時代から弥生時代にかけての矢じりの変化と対応している。弥生時代の茎^{なかご}があることによって固定化され重量化した矢じりは、人を殺傷する戦争の兵器として出現するという。《戦いの場としての役割》には、勝連グスクや浦添グスクと同様に首里城の発掘で出土した有茎矢じりと甲^{かぶと}や鎧^{よろい}の部品が示されている（「グスクの役割（機能）の変化」p.116）。また、「骨からみた琉球列島人」には、首里城右掖門から出土した刀創人骨が紹介されている（p.59）。勝連グスクや浦添グスク、首里城のこれらの遺物は、戦争を想像させる。

その一方で、《生活の場としての役割》には、中城グスクから発見された柱穴と土器の写真が示されている（p.117）。グスクが人々の生活の場であることがイメージされる。また、「何を食べていたか」の中では、伊礼原遺跡の貝塚時代の地層とグスク時代の地層の比較から、グスク時代にはウシやウマの骨、穀物の出土によって農耕社会・文化が出現した事が読み取れる（p.78～79）。子どもたちがこれらの具体物からグスク時代を読み解いていくことは、豊かさや争いの意味を考える上でも重要なことである。

■ 近世と平和

「外からの琉球人イメージ」では、15世紀、16世紀の琉球人は、裸足だがヒゲを蓄え長袖の衣類を羽織った高麗人に近く、刀を持った日本人とは遠い存在として描かれている（p.226）。そして島津支配下に琉球が入った近世になっても、琉球人は兵器を持たない長袖の着物を着た人々として中国や西洋人は描き出す。バジル・ホールが描いた白髪の「首長」（p.228）とはどういう身分の人であったのかが、「モノであらわす身分制」（p.214）で読み解く事ができる。足袋を履いていること、また浮織冠から王子もしくは按司であると判断できるように本書は工夫されている。さらに「肖像画にみる国王と家臣」（p.174）では、明代と清代の肖像画を比較してみることができるよう工夫されている。一見して王が大きく、家臣が小さく描かれるようになったことが分かる。王権が強化され、身分が可視化される近世の琉球王国は「平和」な社会だったと言えるかどうか、子どもたちと追求していきたい。

<里井洋一>

沖縄県史 図説編 前近代

2019年3月15日 発行

編集 沖縄県教育庁文化財課史料編集班

沖縄県南風原町字新川 148-3

電話 098-888-3939

発行 沖縄県教育委員会

印刷 合資会社 精印堂印刷

沖縄県那覇市字真地 399-3

電話 098-832-1311

(非売品) 無断複製を禁ず